



南北
太平記圖會

四

海國圖志
正成
義貞
親王 護良

13
1989
5



門
備 1989
卷

天平年

28 年 書

南北太平記圖會卷之四

初篇

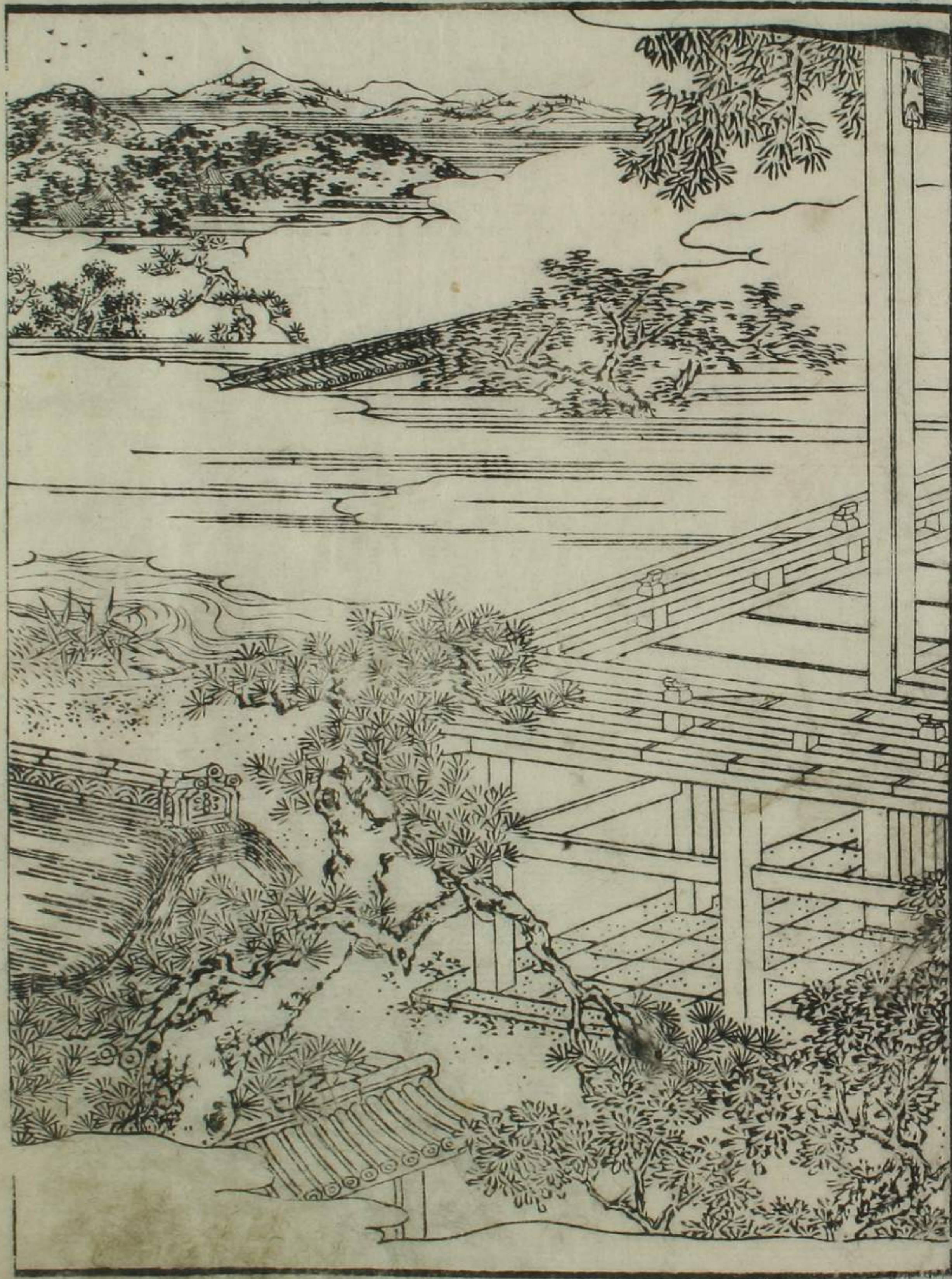
目錄

元僧明極來朝相龍顏
慕父帝幼君詠和歌
中宮紛夜行啓六波羅
先帝遠遷幸隱岐州
追帝駕高德越嶮嶺
高德削櫻樹書節心
笠置囚人處死刑流刑
具行潔死江州柏原
藤房季房謫常州



己先帝と法皇小成事つこととて香深神教と武家より前進し
 とも御法神の内事と志つて有まき中と作おこととて寂龍の御衣
 をも脱せらるす。毎年の御衣水も今このとくおさるはく。依の皇衣と御
 衣の灰の壇ふ準つて古神衣の御拜ありまら。天小二の日のたつとも
 國ふ二の王御衣の地と武家も後不持扱ひくと受くはる是も教衣
 深く思ひつる有るおとどはくはる中を尋ふ去る有る年のも
 元國より明極神と神皇後とつる得智の御神來おせり。天子と志
 皇朝の信ふ御相看の事とあく更くと倒さるうとも。は若神の
 宗旨と候そまひとそまで諸方の知識と西來傳とをなまはら
 御法神の志とて御神神と神皇中つともさるる年の儀とあまらふ
 御くうんの中御の恥がうととと云々もお仕の仕いと耐ひ。若
 皇合馬も守御の侍人と教くせり。初又く幡姫と修く後明極

糸川せらる。と上は家臣教ふ出神なり。玉座より席と為めまはし。明極こ
 へび拜候あり。香と拍とて万歳と後守。時ふ初阿とて日棧山航海
 得く而來和尙は度生せん。明極とてつく。以佛法緊要とて
 度生せむとて曰ふ當法度時如何とて曰。天上有星時拱小
 人間と水不和東御法度年と明極お揖とて退出せり。お五日別
 函実ととと勅使とて。佛日皓慧神神の神を下し。初人時。明極
 教使と封とてけ君元龍と悔ありとて。天日二度風皇と皇衣と
 つと相ととととと。今若武臣の志不困。清龍の悔と合せると
 とも。御神神のおくちる事とまは。妙度九女の御位とふまは
 うらん半粧ひとて恩思とつ。は神の御事と志つてく。とて
 ちとととととととと。武臣もけととととと。及平とと。その後
 徳て後國へ遷幸の儀と。一宮中務御親とと。佐國へ流し



昨日の御と侍致の並び致奔のゆゑに、
昨日の中ふおるおるせうしん

はわらう、沈くらふさむいあぶよまきかよふゆまんえ
いづれもすけき方のゆらむらぶけ篇とも志のぶきやむ

かと思ひはげせうし格とまながう。中車もどるまう。御供の願を
夫の房綱長少将忠政綱長御及清久二位殿のあはなりたり。一統大徳言典侍
都の御名御の更ふつひが。御聖園の武士の千葉介貞胤佐末佐後
入る道雲小山五郎左衛門尉秀朝等より後藤頼朝御孫海東より

あふち方刀馬鞍まを照耀ぐり今日を味とむぬいぐる。京中の男女
あやしの御手をも。傷くふらりかび。今の御前とおく。あまの母と養ひ
よく御供ひきまを。ゆふおをまを。御聖園の武士も諸もあはれの御
よとわらう。白川もあふはれ。御聖園の武士も諸もあはれの御

張せ極くも羽殿不着せうしん。なを後心の御小政めまひ
破籠も進めやうか。なを御聖園の御前もまを。はやく空石
給。是より御聖園の御前もまを。はやく空石
石清水へ御聖園の時佐末佐後判官入道右衛門尉の使ともあり。なを
今この事と思ふおる。入る道雲とらうるま

あふするまを。あふするまを。あふするまを。あふするまを。
と御もまを。道雲頭と比付。御前も御前も御前も御前も。
樓井の宿も遠不雄山と伏見。二回御聖園の御前も御前も。
御不清水八幡太神も奉る。應神天皇の御前も御前も。
ひあふまを。御前も御前も御前も御前も。
思合もあふ。まを御前も御前も御前も御前も。
のあふまを。御前も御前も御前も御前も。

先帝
隱岐國
御遷幸
の
音



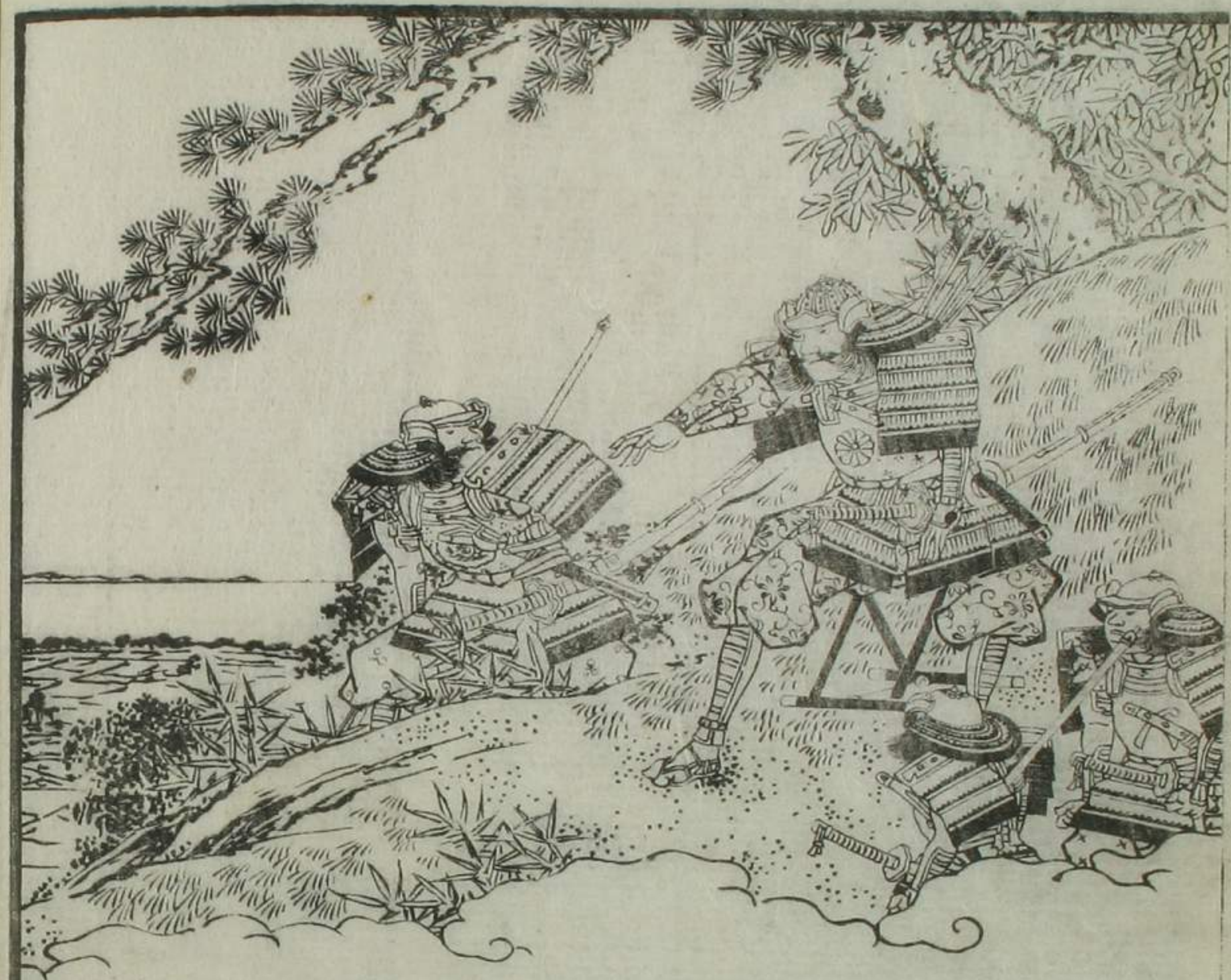
くく鶴鳴小茅盾の月を抹過く馬蹄小板橋の雲を踏破く
約て鶴鳴小茅盾の月を抹過く馬蹄小板橋の雲を踏破く
約て鶴鳴小茅盾の月を抹過く馬蹄小板橋の雲を踏破く
約て鶴鳴小茅盾の月を抹過く馬蹄小板橋の雲を踏破く
約て鶴鳴小茅盾の月を抹過く馬蹄小板橋の雲を踏破く

追天駕高德越嶮岨 高德削櫻樹書節心
追天駕高德越嶮岨 高德削櫻樹書節心
追天駕高德越嶮岨 高德削櫻樹書節心
追天駕高德越嶮岨 高德削櫻樹書節心
追天駕高德越嶮岨 高德削櫻樹書節心

武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし

武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし
武界も遠く去年より山小楯籠るさきひし

兒島三郎
 密小舟段
 天駕
 奉待
 畷



吳王
 勾踐の
 故事



瘡用と加つふ。是等の病頓く多かり。是等丈夫老ちたはひ人有心
助我死我のそ耐之心哉とて。射す句踐と殺して國を歸す
しめんす。伍子胥又てあてて云天与ふた却而受を智け時越
の化とあらず句踐とあてて千の千里の舟を虎と殺つがごと
獨あらずさふあえん。及や句踐の父君闔閭夫その仇をうとく
射す共ふ可戴天す。ちやふあてて射す。後の楚を除くと進
む。夫差あまを殺す。遂に句踐と射の國へ歸す。句踐國を治て是を
貢と稱す其心を結ひ。范蠡又て計て西施とて又容を絶世の美
人と呈すふ赦す。是等あまを呈す。ちやあてて射す。けあ絶はす。頃
天下争ふの美婦をて括ひ成ててい美の百の媚人の眼と迷う
て漸く地上ふ花をささく殺ひ。絶世を僅ふんまが千楚人の心を
傷して忽ち月とあふくと去む。ちやあてて射す。中に入てより。是等

夫差嬖来小航て政を播り。民の愁を思ふ。國の危も察す。姑蘓を
と造り。金殿挿す。四邊三百里。間ふのち枕のちふん。楚を治り
ふ。春日の露脚と埋く。腹を急し。はるふ。月夏の夜の雷火を
集め。婦小易れ。月令彼小浮。木の夜の雨を。宴楽して。家の外を
とすれ。千山白兎の毛。北日の西施と共小航の衣と。若くそをを
ず。夜とて。空を。雨を。ささく。止時なり。伍子胥を。射して。殺り
ふ。法を。い。は。是。を。射。用。ひ。す。武。を。き。又。是。を。射。能。と。南。敵。を。女。を。い。ふ
け。釋。は。を。さ。す。伍子胥を。滿。居。と。共。玉。と。捕。令。を。獲。め。る。陰。謀。と
あ。の。小。子。結。と。さ。さ。く。か。け。け。信。守。水。を。き。の。め。い。是。を。射。た。る。を。問。ふ
伍子胥を。射。て。同。この。姑。蘓。官。殺。十。里。射。の。ち。あ。ふ。ち。ひ。草。涼。く。ち。あ。信。守。
地。と。な。らん。車。を。さ。さ。ふ。あ。ふ。ち。あ。さ。さ。さ。の。木。と。あ。ふ。ち。射。と。わ。つ。つ
て。徳。と。抽。の。ち。夫。差。怒。れ。と。て。殺。ひ。す。又。あ。つ。と。き。伍。子。胥。是。月。多。陀。の

剣を夫差のあふ扱て松もそ入居は剣と磨を退却拵の
 へあや。今國の似んとする半中。西施あり。新の居西施の首を
 切て仕授のあやうとせぬ。とて牙と嚙く。夫差見て斬す
 倭臣伯嚭夫差を河つ。志きり小何の骨を縛守。夫差こそを信く
 て何の骨小死を御人。伍子胥天を仰て歎く。と云。練衣死に即ハこ
 屋下の約あり。今天こそ棄置我死。二年とて年とて越の兵め
 々々我衣服を穿つ。东门小柳垂。一雙の眼未枯。前小越の
 足とて手とてん。とて返ふ剣。依死す。夫差け歎とや。とて
 何の足目。預と皮の骨。つとて。とて。東海。棄心。江東の民との
 たる我と衣と。痛と建。とて。とて。四時。のあれ。とて。や。何の足目死
 してのら。二年。果して越。とて。伍子胥の首。とて。東海。とて。時
 伍子胥が。夫差。とて。とて。とて。越の兵。とて。



児島三郎
 櫻樹小
 詩を記す
 大志と
 頭高

不似たり。越の君はあま不忠を姑とくく其の地不攻入奇楚音
 越の言を合せく是の夫美と越の半叔同夫美とんふ聞ひ受て
 ころふ六十七歳と成入姑福身ふおより越の使者とてとてつへ
 悲ひく會結ふ苦く。時長夫美とをゆけぬねをいふと
 越の下はとくく其の玉越とてつへ。君の長そ傍の慈とあらば
 ばはか今日の日を救ふと一言を卑く。彼を留めて降をとる越
 二勿結あまをゆて救ふあひず。政ふ助えとあかひたり。其は能く
 をあやして勿結のあふ進んで云代柯を規不き。そは移るのつへ
 天越と其あふら。而くと其あふく。忽今日の難ふあつ。今其
 天呉を越あわく。あふをねく。さうと其の越も。明日のつく難
 逢へ。片修ねと輝く。是を得る年二十一年。豊一初してそく
 存んや其の此時不承へは。た也とらう。自責越を并てきて



進む。夫は事の契とて又欲てつと。やふく伍子胥と
蕭平と西ふらる。やらの面目わらうとあふ出の下に
死して何れも。頭を衣の袖に隠し身より方と投じて死す。句踐
後伯嚭と謀し軍とわらふ能を付て殺すゆり。是と在の
浚余多夢の如くもとのヤカラ句踐國を破て退まて西施を
して浚余多夢の如くもとのヤカラ句踐國を破て退まて西施を
君よりあふす。切林石道より退つたのるる。傍西施と付候ふ
純道小むひく我切棄もまらるる。かへと感一夜西施を偷出して
小舟に乘り又細小舟にて西施と小舟に流し。舟の國小むと痛
て姓名と陶朱公とわらふ。中瀬舟乗つて候る。言候くの故半
と多し準入て。一線の也小舟の如くを速に船に載せしを達し
嗚呼忠なる哉言候。南時後余の故勢小むと義旗と傳へ帝

命小忠なる者て人もわらるる。只志の志と夫を子艱難と踏
継布をまきと帝智と教むとんと欲を半不ぬとて。も
忠天より通平と理つる。まねに帝の美尾の流し十余日
当あつて吹風もあまら。船人難をわら。舟に救面艘ち
後尤も小漕かづと。萬里の舟も流し。時陰海沈く日及西北浪
を山起るとして月出東南天漁船の舟も行く。一炊即
出たり。言あまら。昔岸の煙も紫船明ぬまら。松江の風も揚
浪語より教をまのぬまら。却と出つて後廿六日市不舟
後國りを着る。休未後故判官清る。府の船といふ。黒末の
舟所と作ると。自唐と。玉殿と。想入して石仕り人といふ。頭大吏
房六傑少の右殿少房と。仁位殿の馬をうらう。昔の全殿少
坊て。多言即志げと。舟の縁後傳る。さねの場一夜と傳る。舟も

扇と亦の代なき。鶴人曉と留し。聖國の武士の青煙す
 知たり。御所のよふ通々まじ。藤原へ入せうひて。高きまらませ
 修す。扶戸のゆを待し。新政治もなきとも。至山のもある。其を
 入しきもまじく。も曉下の山初北風の御進陣もあがり。年
 何る年なき。百官も花影。其は後信所。月一人易位。展張。延
 代御風。まじく。天人。年暮る。不取。代を中。年。花
 拂。天。日月。と。鳥。維。明。う。かる。年。を。知。ら。ぬ。と。ま。ん。竹。木。も。其。花
 年。ま。じ。く。ま。ら。ぬ。

藤房李房請常只 貞婦悲別没大井河

萬里小治大細言室房卿は子息友房李房二人の飛科うらうら。

こも武家。捕ら。ま。た。ぬ。七。旬。か。ら。お。さ。て。お。人。の。あ。り。て。お。と。じ
 くる。お。家。の。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

けえまじく。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

ま。ま。お。家。の。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

教。と。ゆ。き。ま。ら。ぬ。

ち。ろ。し。と。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

敗。不。飛。持。あ。つ。も。し。づ。も。も。先。の。陣。廻。の。月。陣。雲。容。或。り。お。仕。と。傳。お
 ら。して。柳。原。の。海。を。舟。の。又。い。お。羅。と。傳。ま。て。と。陽。の。慈。と。傳。も。あ。り
 運。の。通。塞。時。の。吾。春。夢。と。や。せ。ん。お。後。事。ま。り。て。哀。果。自。り。

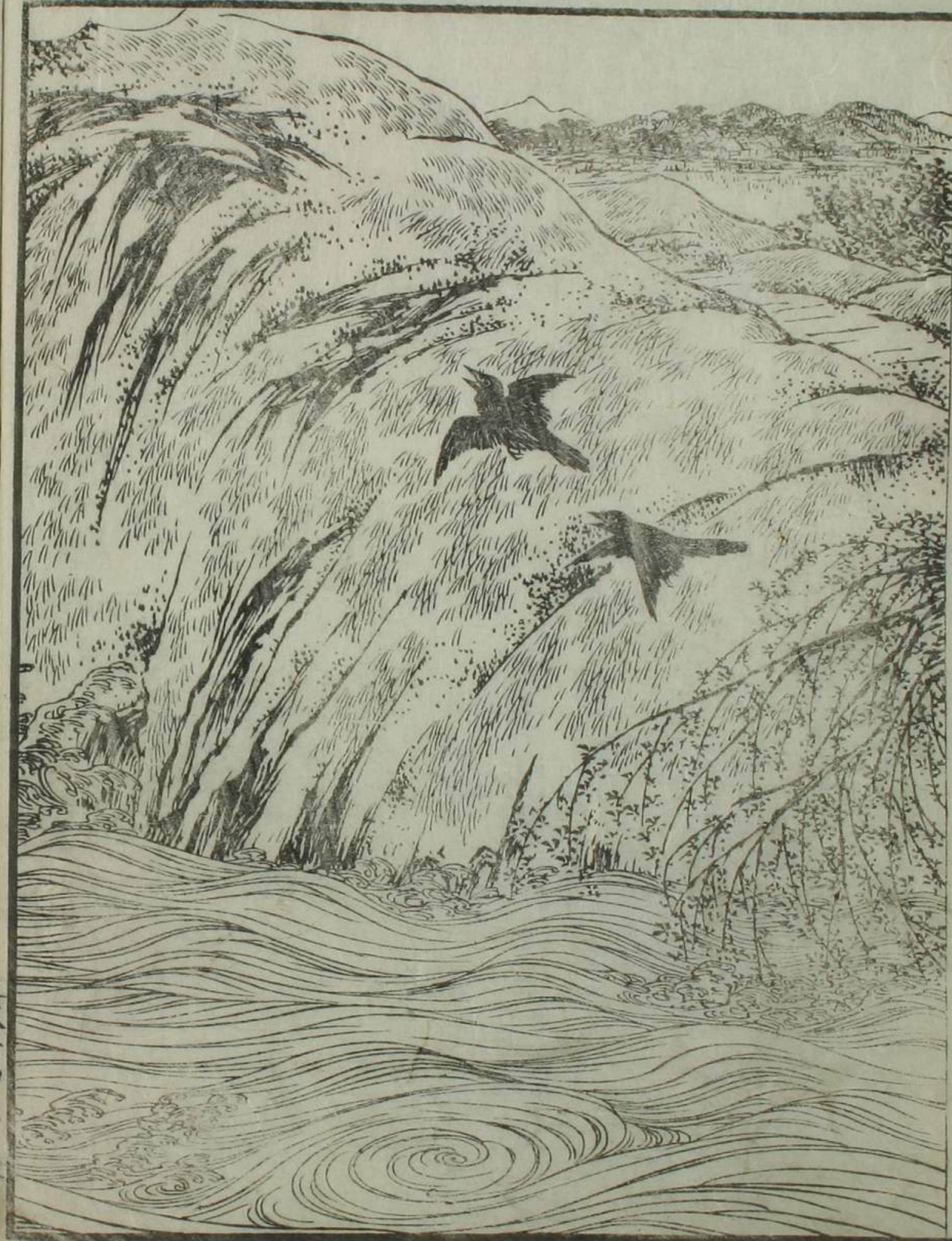
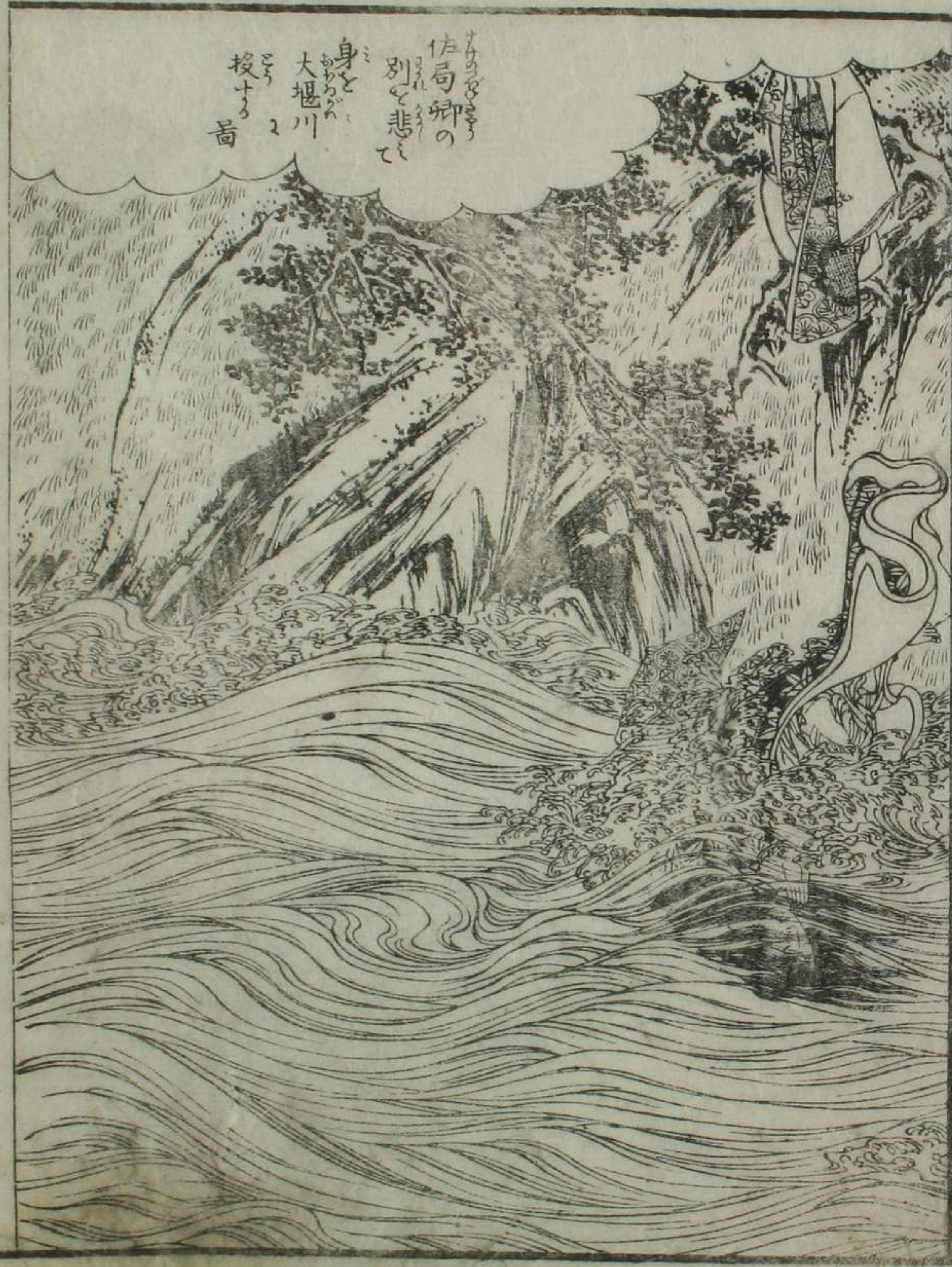
推。替。り。ま。じ。く。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

ま。ま。お。家。の。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

東。大。進。事。房。卿。と。日。國。へ。流。して。在。泊。續。の。事。も。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま
 じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の。

ま。ま。お。家。の。お。ま。さ。へ。ま。ま。あ。る。進。率。ま。じ。く。お。人。の。ま。い。け。と。お。う。る。刑。の
 り。

佐局卿の
別と悲て
身と
大堰川
投す
音



わびはるるのちひははるる

と先の勢いけいこまきとて

大井川の原と樹小方と流ゆるり

百年身とらう故事も

と先帝の御ありはるるが

良忠六波羅吐義言 良忠伴狂道堅牢

去る三月五日北條兼房

浦とよきすけ四年の常陸

殿のは下良忠とら傷あり

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

ヤトして諸國の大名と仰り

と先帝の御ありはるるが

大炊御門仲小治の冊

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが

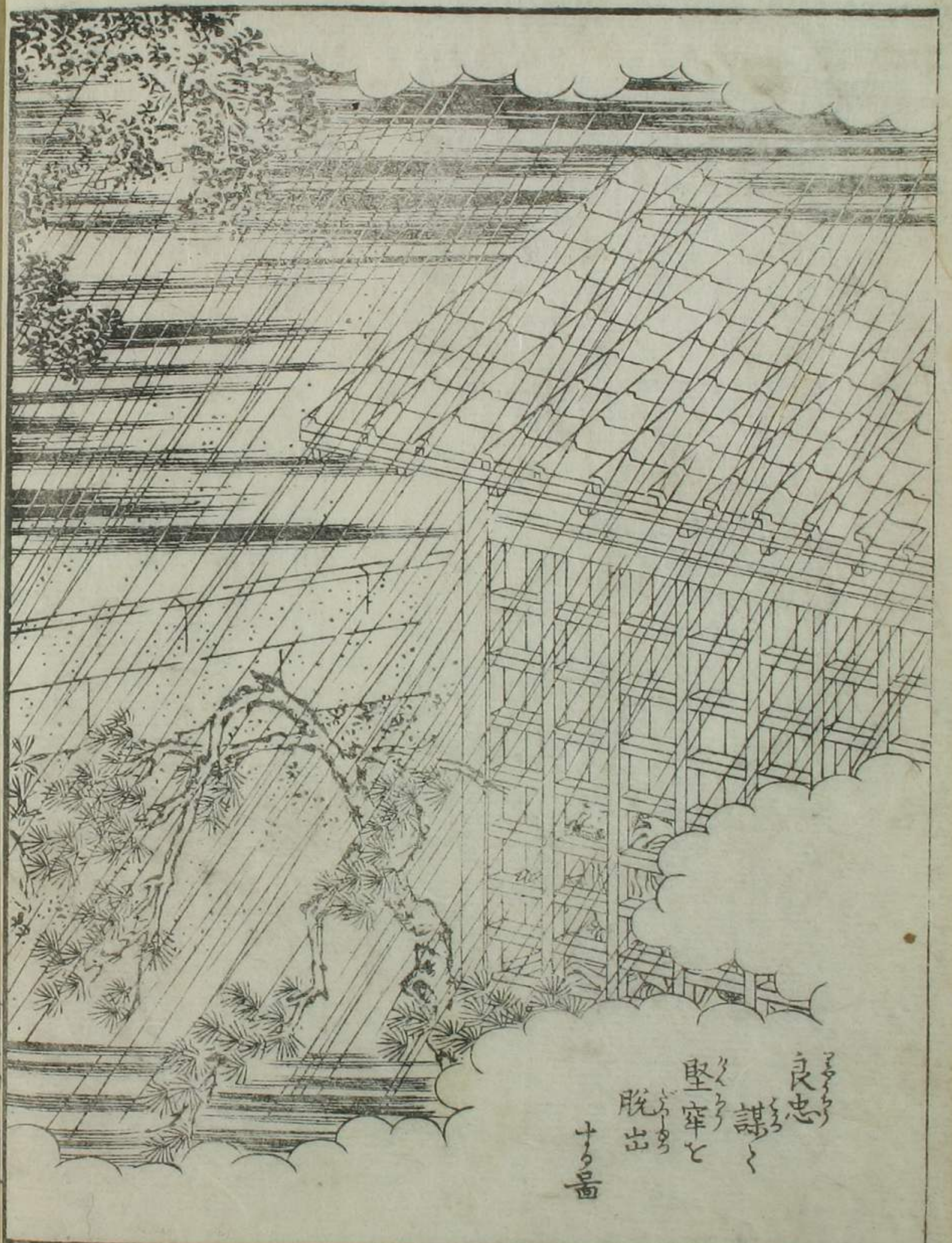
と先帝の御ありはるるが

と先帝の御ありはるるが



くらやう。やまのあやかし 新紀今昔 名詞となく 後念へるよまにぬ。
 幸ひかゝる返惑とてけ半と判人。さうが新紀の月と惣命の
 地とをいふまらうんと惣念を生じ。扱とて六波羅にねへ良忠と生
 捕せくらやう。法印えより思念 浄土なるぬふ 後念のまをを人地
 の中とて侍あひやう。道時音首と切らうとて幸いふまにぬ。
 此れと述ま出らうび末のゆゑ忠勅とあひ 謀計とめらうと
 了と巧。先姑あ甲辰日がら病とてお所移く合せす。このら
 俄お相らうらうき半のまををいふ。死確なうとて前の死を恨み
 尻と出して物欲とまををいふと大言とて罵り。合半一又半のまをを
 角とて十日をうらうらう遠く勢い虚らうらう。此と後とて右の根。うら
 とくしとて更ふまををいふ。居らうらう。屈と無く若良と後。是後まをを

又痺痺麻がや。合とて又とてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 常ふ倍す。姑のむら北とてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 二十日たどるまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 あり。又の法印のむら。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 天の身とてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 色うらうらうとてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 き古わらわらうらうとてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 法印住持とてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 一才の力とてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 かく居失らう。林あまのむらとてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。
 つらう番の者ともて飛く。むらとてまををいふ。まををいふ。まををいふ。まををいふ。



良忠
 謀
 堅
 牢
 脱出
 十一番

三尋在島の耐ふ能く射けらばにてそ海館へい押せり申す耳大初を柳葉の
とて下海国へ流して千葉介を射けらる。け人志を子の昔より流の
才を奉ると。常守の中ふ心を爲すまふはつらふ。今も流の刑もあふ
とらふとも争ひもんと無の事。盛原の杜少陵は天室の乳小強強
瀬變蓮葉。天落陰浪一物舟と天涯の恨を成。それの小野を不
陸波國を近のとき海原や八十過けり。瀟湘の物するはせとそ
修も。流油のかりいと流す。多き者ハ難易を志のつらきと不嘆
お好達とらん。一と然と怒り申す。いんや之身刻は受守。之文辱刻
は死とらう。無ひ骨を腫らしてはせり。いとそち。わじ
つゝるやわたりをそせり。怒りらうす。唯時より無へ極て相痛
をそ来し月を海より入。今もそ志のち絶めとら。出枝の志ありと
願しや。いりらあよ。お控入るるゆりりと終りて。卒末満り

羽平の發を射素門の千がとてゆびひたる。教行をくえらぬ。秘
の好め。俄ふ痛く恨とそ竹花も寂しくひつる。足加江節を
程も好より所厚味を煮く。南をそ志の成りては痛く隔ごと
つらねふ。そ揚や強うりたむ。六事は東へ引ぬく。そ首を切ると
つらどは痛く。源中納言奥のひのそを。西原保張卒の二人
うれを。休末佐返判官入。道参言踏次と我を固仕とて。秘をへ
て。なるらんそあつる。とさう。さう。さう。あつ。や。や。や。あつ。連板の
國を射すうとて

勢多の橋
帰ると時。さへば。さへば。さへば。あまのね。さう。あまのね。あまのね
々人のこころ入わつ。あまのね。あまのね。あまのね。あまのね。あまのね
踏切りて代とてまらう。あまのね。あまのね。あまのね。あまのね。あまのね

やうづきやう。探使移夢ひきつらうとてなまは佐麻呂等中納言
どの内入へまう。ゆるる先世の宮中やまゝの人の中へ入るは
まわらせく。今更か換へて中納言の位とあつたふはてしては
所へかき次等してひらきまてはは天下の教とけり日影とけし
らひつらうとて。改はまひ進へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
在のまはとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
中納言の位もなまはの位とて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
けるの今納言の位もなまはの位とて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
所をなまはとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
位のかき次等の位もなまはの位とて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
やと作らうとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
お知るなまはとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前

かる山像ふねのつらうとて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
居有るなまはとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
道送生死 四十二年 山河一華 天地洞然
六月十九日某とて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
田兒古希左の村落へゆらうとて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
つらも味なり。入らりて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
うらも味なり。入らりて。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
奉らうとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
なり。なまは。宮中作らうとて。ゆまも前
まらうとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前
らまらうとて。今更か換へてなまは。宮中作らうとて。ゆまも前



嗚呼

昌時

兩

義助

西

直義

五

則祐

馬